

引きこもり生活も悪くない!?

河内恵子

1972年に慶應義塾大学文学部に入学しました。大学に入ったら受験勉強ではなく「学問する」と思っていました。歴史や思想や文学を専門の先生のもとでじっくりと学び、三田で何を専攻するか決めようと計画していました。ところが、日吉キャンパスは、いわゆる学生運動のためロックアウト状態になり、秋以降一切授業が行われなくなりました。現在のようコンピュータが普及しているわけではないので、もちろん、オンライン授業などありませんでした。大学からの連絡はほとんどなく、時折キャンパスを訪れて掲示板を見て状況を把握するという具合でした。(今では信じられませんよね。) クラス討論会や学生集会で友人はできましたが、不安な毎日でした。しかし、悩んでいても仕方がないので、この時間を利用して受験勉強のため我慢していた本を思い切り読むことにしました。(こういう時の切り替えが早い私です。) そして、大学生になったら取り組もうと考えていた課題について資料を集め始めたりしました。(何という生真面目さ!) 自らに課していた課題とは、高校時代に強く魅了された作家、三島由紀夫(1925-70)と高橋和巳(1931-71)の世界を自分なりに把握することでした。

読書三昧の引きこもりの日々は幸福な時間でした。この時期に出会った作家のうちで際立って面白かったのがイギリスの小説家D.H. ロレンス(1885-1930)です。夢中になって読んでみると、一日に英語版を200ページほど読了することもありました。自らを「思想の冒険家」と称するこの作家を研究したい思うようになり、英米文学専攻に進むことにしました。例年とは違う時期に学年末テストや英米文学専攻への選考試験を受け、1973年の秋に三田に進級しました。半期で一年分の授業が行われるという怒涛の日々で、とにかく忙しかった。毎日のように三田に通い、教室か図書館でほとんどの時間を過ごすという、過酷で、でも楽しい時間を過ごしました。多くの先生たちから「学問すること」の喜びを学びました。学部・大学院での指導教授であった安東伸介先生(1932-2002)からは、説得力のある論の導き方から日本語の正しい表現まで徹底的に教えられました。義塾の専任だけでは広い研究分野をカバーすることができないので他大学から優れた研究者たちが講師としていらしていました。小池滋先生のもとで19世紀のイギリス小説を読み、富士川義之先生には英詩の世界へと導いていただきました。日本を代表する研究者のもとで学ぶことは最高の贅沢でした。両先生には大学院でも指導を受けました。

20世紀の小説研究から19世紀へと関心が移り、大学院ではオスカー・ワイルドを軸とする19世紀末文学を研究対象としました。しかし、専門分野だけではなく、多くのことを広く、深く、学ぶ機会があり幸運でした。

大学院では厨川文雄先生(1907-78)に中世英文学を学びました。私たちは先生が慶應義塾で教えた最後の大学院生だったと思います。西脇順三郎先生は、授業は担当されませんでした。時折研究室にいらっしやりさまざまなことを話してくださいました。その多くがイギ

リス滞在中の経験だったと記憶しています。厨川先生も西脇先生もまさしく「真のダンディズム」の体現者でした。（世紀末の唯美主義とダンディズムを専門としている私が言うのですから間違いありません！）服装、立ち振る舞い、話し方、全てが洗練されていました。

学び得た全てのことをここで記すことはできませんが、比較文学の講師として三田にいらしていた島田謹二先生（1901-93）の言葉は、当時の（そして、今の）私の思いを明確に表現しているので紹介しておきます。「才能のある人の側で生きることは幸福なことです」。そう、研究対象とする作家でも、教えを賜わる先生でも、共に学ぶ友人でも、才能のある人の側にいることは確かに幸福なことです。英米文学専攻での日々はこの幸福感を与えてくれました。

新型コロナウイルスが強いた人生二度目の引きこもり生活の中で嬉しいことがありました。一つは、学生時代のように小説（英文）が一日に平均 100 ページ以上読めたこと。そして、もう一つは映画『三島由紀夫 vs 東大全共闘 50 年目の真実』の中で、学生の質問に応える三島が発したある言葉が、三島文学を理解するためのヒントを与えてくれたことです。このことについては、またの機会にお話しすることにしましょう。